



モラル・ハラスメントを許すな！①

## 第2の「少年A」

### 「京都小6女児刺殺事件」を考える(その2)

昨年12月に京都で起きた「京都小6女児刺殺事件」について、世間・マスコミ・専門家などがさまざまな見解を交わすなか、12月号「職場のモラハラ人間の行動と対応の仕方」について寄稿いただきました中尾さんも一考察・見解として、大変興味深い視点でお話されています。前号に引き続き、ご紹介させていただきます。(パピリオン編集部)

「中尾相談室へようこそ」

<http://www.jiritusien.com/nakaosodansitu/>

#### ■追いつめられた子供

つまり、荻野容疑者は、生まれた時から母親の支配下に置かれ、その監獄の中、自分の気持ちを無視された“しつけ”というコントロール下に置かれたのである。想像するだけで息苦しく、感情が爆発しそうな状況で生きてきたことがわかる。

しかし、強大な親という権力の前にひれ伏していた子供も、中学になって力がつき始めると、それまで溜めに溜め込んでいたものが堰を切ってあふれ出し始める。それが彼の場合、家庭内暴力という形で爆発した。「俺という人間を認めろ！」と魂が悲鳴を上げたのである。この時が、親が自らの姿勢を変えるチャンスだった。

しかし、親の姿勢は変わらなかった。だからこそ、大学に入っても家庭内暴力が続き、窃盗を繰り返し強盗致傷まで犯しているのだ。相手に理解してもらいたいことがあり、それが受け入れられない時、言動が激しくなる。これを心理学用語でエスカレーションという。彼の行動はエスカレートした。

ところが、そうまでなってもなお、父親の心配したことは『停学になっても就職できるのか』であった。父親が社会規範として機能していなかったらこうすることは、この言葉一つとっても想像される。子供と向き合っていない。荻野容疑者は親から徹底的にディスカウント(無視)されていた。

彼にとって、針のむしろである親から隔離された留置場が、初めて一息つける場所だったかもしれない。そして、親の目から見ていた自分ではなく、ありのままの自分自身と向き合うことができたのではないだろうか。そのため、本当に反省することができ心からの謝罪があった。だからこそ被害にあった女性も受け入れることができたのだと思う。

だが、彼はまたプレッシャーの場に戻された。私は、宅浪していたからよくわかるのだが、大学へ入りますよという親の圧力は、たとえそれが無言であっても日々ビンビンと痛いほどに感じたものである。

大学で彼を見かけた教授が感じたように、彼も周回遅れの私同様、追い立てられていたのだと思う。親がのんびり構えていれば、あるいは他の道もあるよ、と広い世の中を教えていけば、また違う道もあっただろう。しかし、恐らく親のプレッシャーは『同級生に追いつきたい』という本人の思いに拍車をかけた。

そこへ現れた障害—それが、堀本さんだった。

後ろからは、ディスカウントし続け“一人前”にさせなかった両親が、早く一人前になればと強烈なプレッシャーを有形無形でかけてくる。が、自信を与えられて育っていないため、虚勢が空回りする塾での言動。そして、ほころびが見え始める。女児の指導がうまくいかない…。

なぜ、うまくいかなかったか—それは、『きつい言葉で厳しく指導』する親の方法論を受け継いだから。虐待されて育った親がわが子を虐待してしまうように、抱きしめられたことのない親がわが子を抱きしめられないように、人は学んだことを人にし、学んでないことはできない。自分が親にされたように女児を指導しようとしてもうまく行くはずはなかった。

彼は、よくあることだが、自分が巻き込まれた親子の関係を外の世界に作ってしまったのである。

女児は、いつしか自分が一人前でないことを証明するシンボルとなった。そして自分の前に立ちふさがった。彼は、2つの壁の間で苦しんだ。しかし、とりつくしすらない親という強大な後ろの壁には、立ち向かうことも徒労だ。跳ね返されて自分が苦しむだけであることは、これまでの空しい抵抗の過去が教えてくれている。

彼は前に進むしかなかった。が、やればやるほどアリ地獄に落ちた。後戻りできない彼は、『(紗也乃さんが)いなくなれば楽になると思った』—その選択しか残されていなかったのである。

この荻野容疑者の姿は、息子が就職して目の前からいなくなるとラクになると思っている父親の生き写しではなかったか。母親だけではなく選択肢のない生き方をしてきた父親もまた、息子の心を殺してまでもプレッシャーをかけ続けてきたのではないか。

強盗をしても親に救われなかった彼は、いわば一度精神的に殺されているのである。そして、自分を殺してまでもプレッシャーをかけ続けるロボットのような両親がそこにいる。ここで進まなければ、後ろから両親が迫ってくることがわかる。二度殺されたら“精神的に立ち直れない”だろう。

『殺さないと精神的に立ち直れないと思った』

彼のこの言葉は、自分が(両親から)殺されるか相手を殺すかというところまで追いつめられた彼の状況を切実に語っている。

#### ■“事実を消す”ための殺人

そして、『試験監督の交代』が宣告される。しかも後輩に代わる。それは、自分が一人前ではないことを突きつける“宣告”であった。『試験監督の交代』が実現し、それを両親が知ることになれば、またもや後ろから両親が迫ってくる。

それを回避するためになさなければならぬ事はひとつしかなかった。自分の前に立ちふさがっている壁を取り除くこと。それを、交代の当日に行えば、“交代”も“壁”もなし崩し的に消すことができる。彼は、自分を追いつめるトリガーとなるこの2つの“事実を消す”ことしか頭になかったのであろう…。

だからこそ、彼は犯行後、『血だらけの手で握り締めた携帯電話で』真っ先に父親に電話をしたのではないか。女の子を刺した、と。つまり、もう事実はない、と。だから親が私にプレッシャーをかける必要はない、と。そう母親にも言ってくれ、と。彼は、言いたかったのではないかと…。

ここに見られるのは、自分のことをわかって欲しいために反抗しながらも、最後まで親の望むとおりに頑張ろうとしている子供の姿である。「少年A」もまた、親が自分のことをわかってくれないことに絶望し、しかし最後までわかって欲しいことを切望していた。

Aが特殊ではなかったように、彼もまた最初から特殊なわけではなかった。

このような犯罪の場合、“異常性愛”が取りざたされる。彼の場合、ロリコンが犯罪を招いたのではない。その前にロリコンになるような環境があった。自分を脅かす大人(親)と、自分を成長させない家族カプセルの構造である。

成長できず、大人も怖い。心が子供のままとどまっている容疑者が関われるのは子供しかいなかった。が、コントロールするコミュニケーション・パターンしか学んでいないから、人間関係を結べるはずもない。コントロールできなければ無力感に陥る。そして…。

## ■大人がなすべきこと

「少年A」がそうであったように、子どもを追い詰めているのは「親という環境」なのである。そして、今や子供のためと思いつつ子どもを追い詰めている親は日本全国にいる。

能力主義が親を追いだて、親は防波堤となるどころか、それを増幅して子供にプレッシャーをかける。今や、日本全国にモグラの出る土壌が広がっている。

## お母さん。

あなたは“世間の常識”とわが子を無意識の内に比較していないだろうか。私は、家族カウンセリングを行う中で、母親の持つ理想が子どもを苦しめている例を多く見てきた。子供は母親の頭の中のイメージと闘っているが、うまく言葉にできない。親はそれが当たり前と思っているため太刀打ちできない…。

子供を救うのは、子供とのドロ沼の関係から離脱するためには、あなたが煩惱を手放すこと。それに気づかれて明るくなった親子はたくさんいる。

## お父さん。

社会の代表であるあなたが、自分のペースで生きることを許さない社会の価値観の盾とならなければならない。そのためには、あなた自身の価値観が変わらなければいけない。それができずに子どもを追い詰めるとき、その被害は外に及ぶことを本気で考えて欲しい。家庭はしつけの場である以前に気持ちを受け止める場であることを認識して欲しい。

子供を育てることは、将来の日本を育てることであり、将来の日本に責任を持つことだ。明るい顔つきの元気な子供が増えることが、明るく元気な日本を作ることなのである。それをやるのが、取りも直さず私たち大人がなすべき唯一の仕事ではないだろうか。

拙著「あなたの子どもを加害者にしないために」は、そのタイトルから、我が家は無関係と思われている方も多いと思う。しかし、そこに書かれているのはどの家庭もが陥る罠である。同時に、外してはならない子育てのポイントや優先順位が書かれている。この本が世に出てなお、このような事件が起こることが哀しい。是非、学んで欲しい。お願いします。また、お悩みの方、一人で抱え込まず、身内の恥と思わず、どんどん相談し助け合いましう。

(了)

【家族の問題解決ナビゲーター 中尾英司】

◆中尾氏の著書「あなたの子どもを加害者にしないために」は、富士山、コムでもご購入いただけます。「富士山、コム」<http://www.fujisan.com>



## <京都小6殺害>萩野容疑者を起訴

### 弁護側は精神鑑定請求へ

京都府宇治市立神明小6年、堀本紗也乃さん(当時12歳)が学習塾で殺害された事件で、京都地検は28日、元アルバイト塾講師の大学生、萩野裕(ゆう)容疑者(23)＝同市寺山台3＝を殺人と銃刀法違反の罪で京都地裁に起訴した。萩野被告は「あからさまに嫌悪を示され、憎かった。この世からいなくなるようにするしかなかった」と、起訴事実を全面的に認めているという。弁護側は「(女兒を殺害するしかないという)妄想に支配されていた」として、公判で精神鑑定を請求し、責任能力を争う方針。

起訴状などによると、萩野被告は今年10日午前9時ごろ、同市神明石塚の学習塾「京進宇治神明校」の教室内で、女兒の首や顔などを出刃包丁(刃渡り約17センチ)で数回刺して失血死させた。事前に用意したアンケートに回答させる名目で直前に校内放送で他の塾生を別室に移動させ、モニターカメラの電源コードを外すなどしていた。

萩野被告は今年5月ごろ、自分が行った補習の内容について家族から苦情を受け、8月にも塾内の講師評価アンケートで女兒に「授業が分かりにくい」と書かれて、塾の校長から指導を受けた。自分の印象に関する女兒の言葉が頭に浮かぶようになり、凶器の包丁を購入した12月2日の直前、殺害を決意したという。

また、萩野被告は約2年前から精神科の病院に通院していたが、担当医が地検に「善悪の判断はできた」などと説明。地検は「記憶が鮮明で自分の行動をよく覚えている。社会生活も送っており、完全に刑事責任能力がある」と判断した。

一方、弁護団は28日夕、萩野被告が接見で「12月2日に女兒が剣で襲ってくる姿が見えた。防ぐには相手を刺すしかないと考えた。女兒との関係に悩んではいたが、仕返しをする気はなかった」と話したことを明らかにした。また、11月22日と12月1日に精神科を受診して「入院させてほしい」と要望したといい、弁護団は「根本的に妄想に支配されていた。精神鑑定で動機を解明する必要がある」としている。

また、弁護団によると、萩野被告は当初は人が少ない土曜日の3日に殺害を計画したが女兒が登塾しないことが分かり、10日に遅らせていたという。

【太田裕之、野上哲】

(毎日新聞-12月28日21時59分更新分より)